（２０２３年２月掲載）

研究成果を発信する（3）　～助成金を獲得する～

前号では、話が一気に本の「あとがき」までいってしまいましたが、草稿がおおむねできあがった段階（刊行が決まる前）に話を戻しましょう。いよいよ出版社を探すことになりますが、一般的に研究書はあまり売れませんので、自分が著名な研究者である、大きな賞を受賞した、出版社に特別なコネクションがある、といった場合を除き、自己負担（刊行した書籍の一部買い取り）を求められることも少なくありません。ページ数によっては、100 万円を超える場合もあります。

自己負担なしで本を出したい場合、出版助成金の獲得を目指すことになります。助成を得ることは金銭面でもメリットがありますが、自分の本（研究）が一定の学術的評価を受けていることの証にもなります。様々な助成制度がある中で、分野を問わずに比較的応募しやすいのが、科学研究費補助金の「研究成果公開促進費」（学術図書）です。e-Rad に登録され、研究者番号をもつ「研究者」でなければならないといった制限はあるのですが、基盤研究や若手研究といった他の科研費と重複して応募できるため、新たな研究にも差支えがありません。

ここからは、2021 年度助成金に応募したときの経験をもとに書きたいと思います。あくまで個人的な見解ということで、ご理解ください。応募にあたっては、原稿とともに 8 頁にわたる計画調所を提出することになります。ちなみに、2014 年度助成金に応募したときは、調書部分はわずか 3 頁程度でした。うち刊行物の内容は 1 頁程度で紹介するようになっており、調書だけはほとんど理解できない状態でした。それに対して、現在のフォーマットは刊行物の内容を 4 頁にわたって記入することになっており、審査委員は原稿本体を読まずとも概要を把握できるようになっています。

つまり、以前に比べると計画調書の重要性が増したといえないでしょうか。見方を変えれば、原稿そのものには不十分な点があったとしても、応募書類で PR できればチャンスは十分にあるといえそうです。しっかりと納得がいくまで推敲し完成させてから応募する、というのも 1 つの方法ですが、細部に多少不備があってもトライしてみるのはアリだと思います。私の場合も後者で、何度でも応募できるなら、早い方が単純に採択の可能性が上がると考えて勢いで出しました。もし採択なら、決定から刊行までは 1 年間ありますのでその間にブラッシュアップできますし（本のタイトルだけは変更できなくなりましたので、注意が必要です）、不採択なら修正して、次年度に再チャレンジすればよいのです。

計画調書では、著者の研究歴に続いて、「刊行の目的及び意義」を書くことになっています。私の場合、目的部分はこれまでに獲得した科研費や受賞などを列挙して、自分の研究が学界で評価されていることを客観的にアピールしました。意義としては、キャリア教育研究の充実に対する貢献、フランスの比較研究の発展に対する貢献、キャリア教育の実践と政策の推進、という 3 つの視点で記述しました。「国内外における当該刊行物の位置づけ」部分では、自分の

前著およびフランスでちょうど同時期に刊行されたキャリア支援に関する博士論文と比較することで、刊行物の優れている点を明確化しました。「当該年度に刊行する意義」については、キャリアを視点とする「カリキュラム・マネジメント」が求められていることや、「キャリア・パスポート」の導入を理由にしました。このように最新の研究・政策動向にアンテナを張っておくと、自分の研究の相対的位置をつかみやすくなります。

さらに続いて刊行物の内容を記入していきますが、その中で「過去に公開済みの論文等の内容と新たに加わった知見等」を示すことが求められています。博士論文をもとに刊行する場合や、私のように既存の論文をまとめて図書にする場合、この部分が採択の可否を分ける重要なポイントになっているようです。学位論文をベースにした刊行物は、以前に比べるとかなり採択されにくくなっていると聞きます。しかし、採択されている図書も確実にあり、図書としてのオリジナリティを伝える努力を惜しまないでほしいと思います。

私の場合は前号でも紹介した、元論文の編み直しに使った縦糸と横糸を強調することにしました。縦糸とは「学校・教師の役割とそれを支えるメカニズム」のことで、４ つの視点（教師、評価、市民性、連携）に対する知見を指します。横糸は「比較」で、フランス研究ではなく日仏比較研究にこだわって、日本への示唆を導いたことを書きました。実際のところ、元論文を執筆した時点で比較は意識しているのですが、学会誌に投稿するにあたって紙幅の関係で言及できなかったり、「まとめ」で短く記述したものの不十分な考察にとどまり、査読対応の過程で削除してしまったりすることも少なくありません。本としてまとめる際に、そこにあえて注目してみたわけです。

調書の最後には、「学術の国際交流に対して果たす役割」を記入することになっています。この部分は、私のような国際比較研究の場合だともともと書きやすいという面もあるのですが、図書の内容というよりも、私自身が行ってきた国際交流の実績を示して、図書の刊行によってそれをさらに促進できるといったロジックにしました。具体的には、フランスの雑誌に論文を掲載してもらったことや、パリで日仏交流セミナーを開催したことなどです。さらに、他国との交流にも貢献できることを示すために、国際キャリア教育学会（IAEVG）での発表にも言及し、アングロサクソンの研究が多い中にあって、フランスの比較研究が存在感をもつことを主張しました。

前々号で、本を書くことが自分のキャリアの棚卸につながることを指摘しましたが、実は助成金を獲得するというプロセスも、研究者としてのキャリアをフル動員して展開されるものです。ただし、それは出版社との協働作業になります。出版社は、本の販売価格が比較的安い会社、自己負担（公開促進費の助成を得た場合はなし）が少なくてすむ会社、販売価格は高いけれども丁寧に助成金の申請支援や編集作業をしてくれる会社、と様々です。ぜひ、自分に適したよきパートナーを見つけることをお勧めします。

（筑波大学人間系　京免 徹雄）